永錄三年二月四日　三好長慶は修理大夫に住じ御相伴衆として諸侯に連つた、かくて將軍義輝親しく三好邸に『御成り』の上宴賀を享け其後義興を從五位上に叙し筑前守に任じた。

而して畠山政國は河内に在りて遊佐氏奉せしも長敎死後内訌あり長慶之を扶けて平げた所に政國却て亂臣と和した故、長慶大に怒り弟義賢等を河内に遣り松永久秀を大和に遣り遂に二州を略せしめ義賢を岸和田城に久秀を信貴城に居らしめた、但義賢は後弟冬康とかはつて阿波に居つた。

茲に於て長慶の所領は山城攝津河内大和和泉淡路阿波讃岐播磨(一部)にわたり實に九ヶ國である、諸侯皆三好氏に依て官位の執達を乞ひ自然三好天下の大勢を打立てた。

當時上杉謙信上京して將軍義輝に謁するや義輝之を關東管領に任じ長慶の上座に居らしめた、謙信は長慶の專恣を申立てゝ誅せん事を乞ふたが義輝危ぶみて許さなかつたと云ふ事である、許した所が長慶また一筋縄に行ぬ代物であつたのだ。

〜　長慶の病沒

其頃六角氏長慶の全盛を忌み畠山の殘黨と通じて和泉を騷した、長慶弟義賢をして鎭せしめたが元より畠山氏の舊地として連戰決せず却て義賢は久米田の一戰に討死した、敵軍勝に誇て長慶の居城飯盛山城を圍んだが松永久秀策して其後方をゝびやかして圍をとき、更に打て平げた。

其頃松永久秀は京師に在りては所司代となり其他庶政を決して漸く權勢を得人の羨み忌むものも多かつた。

永錄六年の夏八月三好義興病で死した、或は松永久秀其英明を忌みて毒殺したとも風評したのである、之より長慶憂に沈み一切の國勢を久秀に委ね、弟一存の次子義繼を嗣とし未だ幼なるを以て、三好日向守長逸、同好下野守政康、岩成主税助友通、三名に輔佐せしむる事とした、之を三好三人衆と云ふた、而て永錄七年(一二二四)にさしもの英雄も時の定むるまにまに死でもと亂れたる世と袂を別ち去つたのである。

ト　長慶の人物

長慶の英雄たる旨趣は到底信長の如き新世紀の眞先に立ち思ふ存分の事を遣てのける樣なものとは異つて居る、彼には爽へたりと云へ共室町季世の匂ひあり、弓箭に暗からざると共に自ら一種のつゝしまやかなる倫理的情操もあり優しき美しき情緒もあつた。

彼は細川氏の被官なりしと云へ共其實は堂々たる阿波守護職小笠原氏の嫡々であつた、彼は父祖の悲壯なる最後に激して志を立てた、而て百戰之艱ひ遂に天下の長慶たるを得たのは彼に諸將を率引するの力あつた爲である、松永久秀の如きさへ彼の死ぬ迄は實に之一頁家狗に過ぎなかつた。

彼の美しき情義は事勢と云ひながら再び三たび劍戟の間にまみえた晴元の總てを彼に任ずるや芥川に食邑を献げて其餘生を安んじた、

三好成立記は記して、『誠に多年舊功の主從なれば三好殿懷舊の涙しきりなり』と云ふてをるでないか。

彼が政治上に一見識ありしは彼の平島公方が屢々上洛して將軍たらむを請ふた時にも敢て動かず、兵亂を避ひて常に『當公方御馳走』中したのであつた、彼が死ぬや此遺策忽ち破られ却て兵亂を來して三好黨の滅亡となつた、人も知る彼の飯盛籠城當時の逸話は頗る有名である、三好成立記に記るして『扨飯盛に連歌の會ありて永義(長慶)冬康宗養紹邑など列座す三の折すぐる時分に實休(義賢)戰死の注進狀を永義に捧ぐる永義一見して懷中し座を動かす時に傍人皆問にまじる海一ひらと云ふに……座中つけわずらひしに永義ふる沼の淺き方より野となりてとわりしかば諸人皆興に入る……連歌はて後實休戰死の由座中へ被露し定めて敵發向する可し早く入洛せよとて宗養紹邑以下の客をかへしつかはさる』と、悠々として、閑日月ある英雄は又鄕土史の誇である。

(三) 義賢

イ 總說

義賢は長慶の弟である、父元長思ふ所あるを以て住吉(板野郡)の神官として置いたが義賢ひたすら兵學武術を修めて勇名の高きを願ふて居つた。

其頃の狀勢は南海通紀に記して、『細川家の旗本二十餘人の組頭迄三好の部類を以て塞ぎければ其の餘には人ありとも見へず晴元に忠なる者は三好家にうとまれて衰へ三好家に媚る者は擧用せらるゝ故誰さそをともなけれども七か國の諸將も三好家の門に踞をつながざるなし』と云ふ有樣であるから、義賢の强傲も止を得ない、さる程に長慶京畿に覇を稱してより、義賢の名又南海に撼つた。

殊に義賢の弟十河一存の如き彼の幕下にして讃岐の國事を掌にし、鬼十河の勇名も又匿れなき有樣であつた。

ロ 持隆と義賢

其頃下屋形細川持隆は勝瀨府に居て兼ねがね義賢の暴慢をにくんで居つたが只表にするも得ず控て居つた。

天文二十一年(二三二二)の夏であつた、家老三好一族を呼び集めて平島公方足利義冬公當國に久しく控奉る事いたはしく存ずるから、各々智略を以て義冬を一度天下に据へ申したいと、諸將の協贊を求めた、然るに此事は既に長慶の政略にも適せないので旨を體した義賢は之を奉せず、慘々に論じた。

持隆流石に之をくやしく思はれ近侍と計を合して義賢を相摸に呼び寄せ切らんと企て、家老四宮與吉兵衛も其謀に加つたが、到底事のならざるを恐れ却て義賢に通じた、義賢故を以て招きに從はず、潛かに手勢を勝瀨近くに伏せ置き、近侍をして北の河原を御遊遊なされ候へと誘ひ出さしめた、四宮が裏切り三好が所存かくとは夢にも知らざれば、勝瀨の北なる龍音寺に遊行した、卽ち伏兵二千之をかと

み、從士の多くは散じて僅に二士あるのみとなり、鬼十河一存進で遂に持隆を自殺せしめた、之實に八月七日の事である。

ハ　槍塲の合戰

久米義廣は三好之長の五男である、久米氏を稱して芝原城に居つた、義賢の持隆を殺すや兵を擧げて舊主の爲報いんと欲し、義賢の屋形には年若き小姓若干人ばかりあり其外は皆臺所向の奉公人にて用に立可き者一人もなきを知り夜襲を企てた。

然るに此事勝瀧の牛飼共之を察知して義賢に通じたから義賢兵を上郡と淡路に乞ひ之に備へた、茲に於て義廣共黨を率ゐて義賢の妹聟一宮成助を一宮城に襲ひ共妻を奪ひて質とし成助は僅かに逃ぐるを得た。

さる程に義賢の兵一千中富に出で義廣の兵七百は黑田に出で、やがて槍塲(東黑田西部河畔)に衝突した、之の戰ひ尤も激烈を極めたが義廣の黨の敗となり多くは討死してしまつたのである、其中には久米義廣を初め、佐野丹波守、野田內藏介、仁木日向守、小倉佐助などの諸將もあつた。

ニ　義賢の全盛

此時持隆の子眞之未だ幼である、義賢槍塲に勝つてよりやがて勝瀧城に入り罪を謝して入道し實休と稱した、但持隆の妾にして眞之の生母なる小少將を己れの妻としたのをみれば道ならぬ戀は悲くも斯る一塲の悲劇を造つたのであろをか、義賢も流石に愛へて翌年彼の四宮與吉兵衞を討殺した。

持隆の妻は大內氏の女であつたから國にゆさて尼となつた、平島公方も大內氏にもかむとした義が賢公方の母(下屋形之勝の姉)を勝瀧に迎へて奉じ之をはゞんだ、後弘治一年(一二一五)に到つて大內氏に送る事にした。

さはれ如斯して義賢は南海にあつて全盛の程であつたのである。

ホ　義賢の戰沒

長慶は兼て京畿に勢を張て居たが六角氏之を忌み弘治二年の頃宴を設けて進士某をして之を暗殺せんとした、之より三好六角兩氏不和となつた。

永祿三年(一二二〇)の春、六角氏遂に兵を擧げ畠山高政等之に應じて河內に起つた、義賢之を鎭めん爲岸和田(和泉)に軍し三月五日兩軍久米田に戰ふた、天なる哉流矢義賢の胸を貫き討死したから一軍俄に大敗した。

畠山氏の兵進んで岸和田を破り飯盛に迫つたが松永氏河內を騷したから飯盛の圍とけ、長慶全きを得た。

義賢の久米田に陣するや一夜持隆の亡靈其夢に現れ高唱して曰く『草枯ぬ霜又今日の日に消へて因果はこゝに廻り來にけり』と、義賢牒して解を弟冬康に求めた、冬康答へて曰く『因果とはよもぎ車

の輪のかりに廻るも遠き三好野の原」と、義賢尙憂へて居たが果して討死したと云ふ事である。

享年僅に二十有七歳であつた。

ヘ　其後の狀勢

義賢の死後老臣矢野駿河守等義賢の小少將に生みし長治を嗣とし、眞之を奉じて居た、然るに當時亂國の最中であつて川中島桶狹間厩島等の諸合戰相次ぎ、自然京師も安すからざるに長慶は病みて恍然たる有樣であり、諸將も何事かを策して頽勢を既倒に保つ要があつた、其内に永錄七年長慶は病沒した。

茲に於て松永彈正久秀は兼て將軍義輝と相軋りしより、久秀と謀りて先づ平島公方を長門より阿波に迎へ、やがて之を將軍として天下を保たんと企てた。

D　三好氏の衰亡

(一)緒言　淺き方より野となりて三好氏も長慶義賢の沒後は衰勢を表した、三好黨の中にも松永久秀は自立の志あり暗中飛躍の好機を待て居たのらしく私かに策する所あつた、其他は同族と云へども相扶けず事を共にするも一且に過ぎず、内訌に内訌をつぎ、遂に爲すなきに終つたのである。

(二)京畿三好黨の衰亡

イ　總說

長慶は子義興(義長)の早く世を終へてより一存の次男義繼を嗣となし所謂三人衆を附けたので先づ家國は安泰なりと思ふて居た、而て病の爲事を辨せざるに到るや久秀は乘じて其弟にして淡路を鎭し文武に秀でたる冬康を之に讒して殺してしまつた、如斯して三好黨の中に自よりも勢あるものは無くなつた、加之間もなく長慶は死去したのである。

ロ　義輝と三好黨

頃は永錄の八年、久秀は三人衆と計を合して將軍義輝を殺して平島公方を立てんとの策を回らし、將軍家の新邸が未だ門扉の備らざるに乘じ請願ありと稱して兵を京に入れ、俄に襲て之を殺した、一聲は雨か涙か時鳥、義輝の辭世は舊世紀が過去無量劫の時波に沒しもく名殘の辭である、心ある者は皆恐る可き新世紀の開展を思ふて愛へ且悲んだのであつた。

それはさて置き、三好黨は間もなく故義輝の二弟を求めて鹿苑院の周嵩を殺し、一條院覺慶を捕へて正に殺さんとした、覺慶は卽ち後の足利義照である、が幸ひにも細川藤孝の才覺により逃亡して江州に行き、後越前の朝倉氏に投じ、又更に尾張の織田氏に寄り上洛の機を待て居た、斯く覺慶を逃がしたが其流寓せる間には兎に角洛の内外を三好黨に掌握して威權赫々たるものであつた。

ハ　久秀と三人衆

織田氏は今川氏を破つてより尤も熱心に上洛の機會を待て居たが覺慶の義照を迎へてより愈々其志

を堅くし準備に忙殺して居つた、然るに三好黨は愚にも内訌を作し三人衆及び久秀は互に相猜み相疑ひ、遂に三人衆は義繼を奉じて飯盛より高屋に移り大和に迫り平島公方義榮の書を得て同族を集めた久秀之に對して彼の畠山黨を煽動して所在を騷擾せしめ、自らは高屋城を攻め其黨をゝびやかした、しかし久秀勝を得ず堺に走り堺市人の仲裁により居城大和の志貴に歸るを得た。

ニ　義榮將軍に任ず

義輝の不慮に倒れてより平島公方はやがて將軍を拜任する筈であつた所公方義冬病み其はこびに到らず只義冬の子義榮阿波に居て三好黨の執奏により從五位下左馬頭に叙任せられたのであつた。

永錄八年の春、義榮は篠原長房を先陣として兵庫に到り先に松永に與みしたる一黨の城を攻め諸將に越水瀧山小泉淀青龍寺の諸城を徇へしめた。

義榮卽ち富田普門寺に到り三好長逸は上洛し京師も小康を得たのである、かくて長逸は早速宮中に參内し宮殿を修理し奉り、義榮には愈々將軍叙任の宣下あり、且義榮は二條城に入城する事と定つた。

然るに事は不測に碎けて局面一變したのである、之卽ち三好黨の再内訌である。

ホ　義繼と三人衆

將軍の榮爵を以てして倍々臣の弑逆に逢ふと云ふ世であるが、三好義繼と三人衆は兎角主從である然るに三人衆は各々其私を用いて將軍も之に寄り、義繼の存在は誰顧みる者もなかつた、茲に於て義繼の乳母の父なる金山駿河守は策して偶々久秀の族喜内が高槻にて義榮の爲手討になりしより不快なりしより愈々便を得て、合體する事を得た。

永錄九年の春、松永久秀は奈良の郊外多聞の城に據り兵を擧げた、三人衆等勢を誇くして之を攻め、東大寺に陣した、久秀急に夜襲して大佛殿を燒き敵を堺に潰走せしめた。

茲に於て久秀の威名京畿に敷たのである。

ヘ　其滅亡

之は寧ろ安土桃山時代の事頃であるが今大體を記すと、永錄十一年織田信長は足利義照を奉して上洛し久秀義繼は之に降り、降らざるは打て奔らされた。

其久秀義繼も前後して程よく信長に亡ぼされ、潰走したる三人衆等の屢々再擧を計つたが遂に能はなかつたのである。

(三)阿波三好黨の衰亡

之も大體を記すと阿波に於ては下屋形細川眞之を三好長治奉して居た所、此長春は血氣にはやり士心を顧みず讃岐の諸豪と戰はんとし眞之をすら眼中に置かなかつた。

それでも信長の上洛する時には京畿三好黨の後詰として眞之を奉じ富田普門寺に陣したるが破れて歸國した、將軍義榮も居たゝまらず阿波に歸つたが撫養に於て急に病沒した。

長治は依然勝端に居たが眞之と不和となり眞之諸將をして長治を自殺せしめた、長治の弟存保は爲

に阿波に下り勝瑞城に入り治をみる事とはなつたが、土佐の長曾我部元親大舉して勝瑞城を圍み遂に陷れた、茲に於て存保は讃岐に去つたけれ共阿波の三好氏は沒落の悲運に際會したのであつた。

之等は實に天正十年中の事であつた。

平島公方

平島公方の系譜は足利系譜と阿波將裔記とを校合して次の如しと思ふ。

- 義親（義榮）
- 義冬
  - 義助
    - 義種
    - 義次
      - 義景……
- 義植
  - 義尙
    - 義任
      - 明岳和尙（萩原光勝院住職）
  - 義晴（將軍）

義植其妻を好まず子義冬と共に紀州より淡路を經て阿波に送つた、其時細川家之を那賀郡平島の西光寺に置き後御所を立て附近十二村三千貫を供へた、富永結岐小寺荒川森村井天代淺田乾西山堀眞淵安井三江湯淺の諸從士も又其所を得た。

細川持隆公方義冬の爲計りしが三好義賢之に從はず持隆を殺したから、義冬等去つて大內氏に寄て居た、然るに松永久秀等之を再び阿波に迎へんと計り大內氏に乞ふたが許されなかつた、それで狡猾にも僞り誘ふて船に迎へ忽ち海上に出で平島に再び置くに到つたのである。

而て三好黨等愈々將軍義輝を殺して義冬を將軍とせんとした、然るに義冬は中氣を病み居りし故子義親（又義榮）上洛し高槻に陣した、義親の弟義助も上洛せんとした。

然るに松永久秀は義親との間一變せるを以て其親族（松永の妻は一宮の舅の妻のいとこなりと）一宮成助を通じて止めたらしい阿波將裔記には松永が成助を將軍とせんとせし故成助義助の上洛を止めたりなど記して居る。

かくて義助と成助とは中島川口にて合戰に及んだから富岡城主新開道善及び三好長治等之をなだめに義助の上洛を差止めた。

時は永錄九年の春、松永黨と三人衆は奈良に於て大に戰ふた、之を將裔記は解して『上方の三好衆はとかく義助を取立といゝ松永は成助を取たてんと云ひ三好松永不快となりて西都にて度々戰ひけり』と記して居る。

かゝる間に織田信長上洛し京畿三好黨の沒落となり、長曾我部元親侵入して阿波三好黨の沒落となり、義親は撫養に病沒し義助は靜かに天命を僥倖せんと待て居た。

太閤記によれば長曾我部元親又此公方を奉じて信長の故智を襲はんとした樣である、兎角舊來通りの待遇をして居た、然るに蜂須賀氏の入國するや其領をとり新に一百石を給ひ一家臣とした。

即ち不平なる小貴族は京に去つたと云ふ事である。

第四節　結　論

足利氏が天下を得て阿波は細川氏の分國と云ふ事となり先づ封建の形は完成したのであつた、乍然尙後世の夫に比して統轄力が不足であつた、室町季世と安土桃山時代を通じた戰亂も實に茲に胚胎して居つたのである、只元來足利氏が天下を得たのは民衆戰亂に倦み疲れて安息を希求した爲であるから初めは流石に柳營の權勢も盛にして花洛の繁華も比なき有樣であつた、茲に於てか室町期相應の文化も蒸生したのである、而して其文明史の一時代を作れる內には偶然にも東西人の遭遇率て東西思潮の遭遇ともみる可き、海外貿易の發達基督敎の東傳と云ふ樣な事項をも特に含んで居るのであつた、私は今之を鄕土史の當時代に推して少しく記そをと思ふ。

京屋形と阿波屋形との關係は確かに細川氏が京華の移植に腐心した事であるをと想像せしむる、而て勝瀨城下の繁昌なども如何ばかりと想像せしむる、蓋當時の文化は形而上に於ては先づ宗敎より云はんか。阿波は元より弘法の故地とて眞言甚深の加持ありと云へ共時なる哉京系の新佛敎鎌倉系の新佛敎は南漸して漸く盛なるに到り、殊に門徒は衆俗の間に延び法華は三好氏一族の信ずる所であつた、禪宗なるもの既に鎌倉の頃より阿波に行れたが室町に到つて宗風頗る揚つた樣であるらしい、南北

朝未だ一致せざる時南方諸帝の尊信を受けた一世の名僧大燈國師の下に了義と云ふ阿波の僧あつた。又夢窓國師は北帝の崇信を得た名衲で建治六年に生れ正平六年に終る七十六歳の間、嘗て細川和氏の招を享けて阿波國秋月府內に新に伽藍を起したる浦陀寺の開基となつた事もある、僧絕海（延元元年——應永十二年）は夢窓國師に打出せられた名僧であるが細川賴之之を勝瀨府內の寶冠寺に招いた事もある。

かくて夢窓一派の盛なるや、了義などの名は誰知る者もないが、同じく阿波の人にして夢窓の法弟觀中（康永元年——應永十三年）は喜慶元年寶陀寺（阿波）に居り明德二年等持寺（京師）に移り後には性眞智禪師とも崇められた、又太岳（興國六年——應永十三年）は阿波一宮氏の族である天龍寺南禪寺鹿苑院などに住し足利義滿の尊信を受けた、又祖淚は生死年は不明であるが同く一宮氏で補陀寺（阿波）淸見寺（駿河）眞如寺（京師）に住し頗る名あつた。

彼等は何れも其の遺稿を殘して所謂五山文學の一分をして居るのである。

此時代の文學は詩歌文共に尙古若くば擬古の流風ぬく可からざるものであつたが鄕土の如き畏くは管領家諸將及び之に出入する僧祝雅客のたしなみと云ふ程度に於ての和歌連歌の如きものゝ流行があつた又他に及ぼした影響から云へば能樂狂言の如き、藝術は確かに當時の武士生活の內容を擴げ武士道倫理に一味の典雅なる氣格を以てした、さはれ之等も特有の民謠俗謠舞踊及び信仰とに日夕困敝の

辛苦を慰めらるゝ下層の民衆よりせば多分沒交渉であつたかも知れぬ。

次に吾等は當時形而下の文化を思ふに天下太平なるに及び産業の盛なるは當然の徑路である、時代の推移と共に諸侯諸將は皆其城郭に據つて相競ふに到つた時も尙以て其形勢は持續した、之割據の勢が進めば進む程諸侯諸將は兵力併びに富力を必要とする爲と思ふ、

富の上に文明の花は咲く、花の香に醉ふた者は富に焦慮せざるを得ぬ、卽ち奢侈あり貧苦あり德政あり掠奪あり領地爭あり相續爭あり、相連る所を一貫する傾向は所謂下克上である、戰亂である如斯くして安土桃山時代とはなつたのであつた、而て彼の海賊貿易あり開港貿易あり海船貿易あるに到つたのも此一種の黃金主義（マーカンタイルシステム）ありし爲とも云へよふ。

細川三好の全盛したる所以の淵源は實に海賊貿易である、細川氏は阿波讃岐の海賊を從へ沿海近海の海權を握つて居た、讃岐の塩飽諸島の海賊も頗る有名であるが阿波に於ては森四宮二家尤も海賊の宗であつた海東諸國記には鳴門海賊大將軍源某の名あり同記は朝鮮の書である況や日韓舊定事例に依れば大內氏或は宗氏の引によりて細川氏三好氏が彼地に舟を送りし事は尤も明白である。

海賊貿易は名の如く海賊と貿易とを俱に行ふものにて其淵源は遠く神代の海神の裔たる海部にあるのである、彼等が海外に盛に跳梁したるは南北朝末より室町安土桃山の各代に亙した間で北は今の露領沿海洲より朝鮮支那安南暹羅馬來呂宋印度に及んで居る、其の勢大なりしは明の滅亡の一因なうと

史家も說く程である、明人かつて歌ひて曰く、島夷日本稱最雄髮首駢栂烱兩瞳乘舟截險洪濤中跳躍若蠭聚若蜂と、私は茲に於てか阿波海賊の間に發生したる一品流盤伊流の海賊戰術が這個胡蝶陣の經驗なくて生じたるものとは思はぬのである日本固有の海賊戰術、一品流は三島流より出でたるもの、其學者毛利氏に仕へ毛利氏は一品阿保親王の裔なれば依て名ずくとも云ひ、又盤伊流は太古岩楠船の時より傳へ足利義尹之を用いし故に名ずくとも云ふ由である。

かくて後外船の來商するあり追々南蠻の商船も加はりて茲に開港貿易あるに到つた、當時の開港の多くは細川三好氏の勢力圈內であつた、堺港の如き尤も名あり西敎史に依れば阿波の鳴門も實に殷賑なる貿易港の一であつたのである。

後世蜂須賀時代に鹿兒島を介して支那朝鮮琉球との密商が行れたと云ふのも此時代よりのものではないか。

以上の如く室町時代は決して産業も起らずに濟だのではなかつた、而も巨額の貿易も畢竟諸侯又は諸將の利たるもので地下の小民は常につねに苛酷なる科稅に苦んで居たにすぎなかつた事であろを。

されば上下隔絕して遂に遂に安土桃山時代の展開するに到つた、下克上は或は極端なる上克下の反動であつたかも知れぬのである、私は今此結論を終るに當り特に當時歷史の特色たる東西人遭遇の事項を阿波と基督敎との關係を研究するに依り幾分想像してみたいと思ふ。

（附）　阿波の基督教

基督教は猶太の地羅馬の一洲たりし頃キリストと稱するイエスの訓へたる宗教である、其の東洋に傳りしは使徒時代ならんも頗く盛なりしは極めて後代である、日本に傳りしは或は桓武帝の頃外船往來し京師に市場を開きし事あり現に太秦と云ふ如き基督教に關係ある地名ありなど云ふ人もあれど、先づ室町季世天文十六年フランシスサビエーの傳道を以て初めとする、

基督教は東西二派に分れしが東派は彼のコンスタンチノープルの落城以來多く振はず、西派は一時全盛の期ありしが、恰も我が室町季世の頃『宗教革命』の事あり及机黨（プロテスタント）（後の新教）頗る盛なりしかば其反動としてゼスイット派は東洋に其信徒を求んとなし、恰も西人東遷に伴ひて印度及び南洋に傳道する事となりサビエーも其派の教師として東洋諸島に巡教して居たのであつた。

然るに我が天文十二年（二二〇三）アンジロと稱する一日本人あり來りてサビエーに依り教を享け印度の神學校に入り之を終へて二人日本に向ひ先づ薩摩に着した之實に天文十六年の事であつた。

然るに此アンジロは伏猪床に『阿波人里見勘次郎大永の頃ヤッの幻術を享く』と云へる勘次郎と同人名にて羅馬流の發音をなせるものならんと思はる、南蠻寺興廢記には『又一人の伴者あり……此人日本和州の產か本名了西と云薩摩よりろをまに渡り天主教を學んで日本に來る』と云へる了西は畏く勘次郎の異名ならむと信ぜらる、然らば和は阿の轉化なり、又他の書によれば彼を薩摩人とせり、乍然彼は人を殺して出奔隱匿せる履歷ありて此點より見れば自國に安住し居りしとは思はれず阿波薩摩は古來密貿易の航路なれば阿波より薩摩に大永頃奔り後外洋に向ひしものならん乎、蓋し誤なからむ彼の才學人物等はサビエーの書翰集にて明白なり、實に稀世の偉丈夫彼にあらずんば日本教化の大業を提げて絕世の偉僧サビエーを誘ひ來らしめ得ざりしならむ、しかも如斯き大人格は鄉國に於て誰か相知らん、國を逐れて遂に支那の寧洲に徇教の末路をとつた。

但里見勘次郎は阿波人で日本最初の基督教徒なるが、阿波に基督教の入りしは之よりも漸く後なりしかも知れず、鳴門堺などの外國貿易盛なるや初めて阿波に同教の入りしものありしやも知れず、兎角サビエーに次ぎてヴイレラの京畿に來るや三好氏よく之を保護し長慶の如き忽ち洗禮を享けたとも云ふて居る。

當時の教會所在地なる京師堺高槻和歌山飯盛嵯峨島八尾等は皆三好氏の勢力範圍であつた、從て阿波人の基督教を信ずる者も在つた事と信ぜらるゝ、尤も松永久秀は堅法華にて大に外教を惡んだと云ふ『みよしさ』の系譜畧書に十河みあと正安と云ひ三好じもれやう下野と云ふあり、此みあと及びじもれやふは該教の所謂バプチズムネームに外ならず、正安は西教史に三好義賢戰死三年前に教師トレーを迎へ大教會を建てたりし堺の領主なりし、彼の十河存保（ツカヤス）を云ひ、下野とは三人衆の一人となりし三好下野守政康ならむ、吾等は茲に三好松永の內訌にも信教上の衝突をも存せし樣思ふなり、當時の

狀勢を知る爲西教史の要領を記しみん。

一五九九年ヴイレラ師京に布教するや天主教を敬愛する高貴の人多き中にミヤウシ殿と云ふ幕府の重臣ありて大に周旋したり。

一六六一年トレー師堺の君主より書を得て行き大教會をたてたり其頃ミヤウシ氏の近親サマサンドノ、シコンドノ、シチイドノ、ありて皇帝(將軍か?)に謁するを得敬意を表したり、さて公方に屬する二大臣中ミヨシギザン殿は因循にてダクサン殿は惡謀なり遂にダクサン殿之をすゝめて公方を弑せしが間もなく信長上京したりき、當時信徒約十五萬云々、長く此ミヨウシ殿は三好長慶が、堺の君主は十河存保にて、サマサンシコンシチイの各ドノは三好三人衆を云ふか、ダクサン殿は勿論松永彈正久秀の事ならむと思はる。

さてかゝる狀況なれば阿波に基督教の行れしは意想外の狀況なりしやも知る可からず、其の有効に禁止せられしは德川幕府の初めなるが當時蜂須賀藩よりの報告に曰く「二三人出來申候侍分も二三出來候」と、他藩の報告も一二人又は二三人の紋切形なれど侍分二三だけ餘計なり、されば少しく想像すれば其全く跡を存せざるに到る迄は頗る歲月を要やし、悲慘なる刑罰の執行もあつたのであろを。

今德川幕府の頃の宗門改の古文書を錄し置かんに、曰く。

仕上る事物の事

吉利支丹宗門御改御法度書猶以此度被仰出之趣拜上奉得其意事

一、私共に親兄弟妻子眞言宗にて則檀那寺福島本福寺を相賴申所實正に御座候(中略)自今宗門之者聞出申候者早速御那奉行迄御注進可申上候爲後日書物如件

寛文十二年子四月朔日

板野郡之內平石新田

佐五右衛門(印)

(以下略す)

江口彌三兵衛様

位田吉衛門様

右(中略)眞言宗則拙者檀那に御座候(中略)爲後日書物如件

同年同月同日

本福寺(華押)

同上宛

以上記し來りて戰國劍戟の時に於て尙『神よ主よ』と呼ぶ靈的憧憬が武門庶族の間に存して居たのを知る、セスツィト派は或意味にて忌む可き宗教的侵略主義であつたが、サビエーの如きは實に高僧と云ふ可きものであり、其徒が此新く權威ある福音を傳へて、汝何を食はんと思煩ふなかれ野

の百合をみよ、ソロモンの榮華も此花の一にしかざるなりなどゝ訓へた時には、不安不信の境界に彷徊せる時代の民衆が泣て悔改め死して不朽の道を求め、爲政者をして終に驚駭せしめたのも無理がないと思ふ。

尤も武門の内には單に政略上の手段として信じたのもあろを。

（附）

鄉土史に關係深き古城を集錄せん其詳なるは『阿波古城將記』等を參照せよ先づ國外よりす。

如意城　天文九年細川晴元三好元長等據れり洛東如意嶽にあり

勝軍山城　山城愛宕郡白川村

船岡山城　洛北紫野にあり紫野大德寺聚光院は三好義繼の建立なり

勝龍寺城　山城乙訓郡神足にあり曆應二年細川賴春の據りしより以來

淀城　山城久世郡淀町藥師寺氏の據りし所

高屋城　河内古市高屋にあり又高江城とも云ふ三好義繼據れり

小山城　同じく高屋の内小山にあり三好康長よれり

若江城　中河内郡若江

高安城　同郡高安にあり松永久秀かつて據れり

飯盛城　河内は北河内にあり三好長慶の本城なりき

私部城　畠山氏を三好松永攻めたる所河内の私部にあり

德專寺城　河内の多治井にあり松永久秀かつて據る

高倉寺城　和泉なり天文中三好光舷光俊父子よる熊取村大字小谷

岸和田城　和泉なり附近八木村額原は久米田の古戰場なり實休の墓あり

堺城　堺の東北なり顯本寺に元長の墓あり歸本海雲善室大居士と云ふ南宗寺は長慶其父の爲に立つ妙國寺は義長叔父の爲建立せるものなり

野田城　市中となれり攝津國大阪

福島城　市中となれり

鷺洲城　大阪府西成郡浦江村なり跡定かならず

大阪城　今の大阪城とは異なるが如し

江口城　攝津東成中島なり大永天文中三好宗三政長よれり

中島城　中島村なり跡定かならず

枚並城　同上

柴島城　西成郡柴島なり十河一存初めてよる

三津屋城　楠正行の古城を三好長慶の修したるもの附近喜連城あり東成郡

高槻城　附近如是村東五百住城垣内村民某の宅は松永久秀の館跡

三宅城　三宅村にあり

茨木城　附近宮田普門寺あり晴元墓は不明

井川城　正平中以來の城、清水村真上靈松寺堂後三好義興の墓ありカンカン石也

服部城　那家城の水源の砦なり神峰山寺松永久秀寄附の半の玉あり

池田城　池田にあり池田氏の故城なり

有岡城　池田にあり

伊丹城　伊丹城なり戰國時代築城術上の一小モデルなりしと云ふ

鷹尾城　細川高國永正中に居る一名蘆屋城と云ふ

越水城　大社村越水にあり河原林かつてよる

大物城　大物浦にあり

東富松城　尼崎附近稻野村大字西野西にあり藥師寺氏の城

尼崎城　大覺寺城と云ふ細川高國の城なりき

車瀬城　三田町にあり有馬氏の故城なり

原田城　三好日向守居る豐能郡原田村

那家城　天文中長慶の築く所東西五七南北三九の間數にて高四丈なりと

家原城　和泉國分のつけをちなり八田庄村大字家原なり

多聞城　奈良市郊外にあり東大寺大佛殿雲慶作持國天は小笠原長清寄進

那山城　又西の京の城と云ふ

信貴城　物部守屋のかつて據りし所にて松永氏の居城なりき

龍門山城　松永氏の支城吉川某かつてよる大和吉野山口村なり

倉橋城　原田城の附近豐能郡倉橋三好伊賀守天文中よれり

伊澤城　阿波郡伊澤にある伊澤氏世々日鷲向山に居り子孫今あり

川人城　上喜來にある川人越前守居る子孫今あり

日開谷城　新田氏の所據と云ふ

柿原城　柿原は家原の意源太源五は川島に討死す

川島城　廐植郡川島なり篠原彈正紫雲の居城なり

木屋平城　木屋平にある松家越前守

岡崎城　板野郡岡崎にある

北泊城　同郡同村にある

勝端城　細川氏累代の居城
岩倉城　美馬郡岩倉にある三好康長の子德太郎居る
脇城　中御門家の裔仲房居り文明中伊豫に去る
重清城　重清長政居る
大西城　三好郡池田にあり小笠原累代の城地なり
芝生城　之長及び元長之に據る
白地城　大西出雲守居る
一宮城　名東郡一宮にあり一宮氏居る
芝原城　久米安藝守居る
花房城　上八萬にあり仁木日向守居る
野田城　佐那河内にあり野田内藏介居る
藏本城　小倉佐助吉則居る
井上城　藥師寺阿波守居る此人建長頃の人子孫與一與二あり
今切城　篠原玄蕃頭居る
柳野城　勝浦郡柳野村にあり福良氏の居城
櫛淵城　那賀郡櫛淵村にあり秋元和泉守居り今に到る
富岡城　新開遠江守居る
本庄城　清安藝守居る其墓桂國寺にあり
平島城　平島公方居る
西方城　東條關兵衛の伯父出羽守光秀橘に移ると云ふ
日和佐城　海部郡日和佐にあり
海部城　鞆にあり海部將監居る永錄文明中刀工氏吉氏久等聞ゆ
櫻間城　名西郡櫻間村櫻間氏居る
鄙城　近藤重次居る
矢野城　矢野駿河守宗春居る

第七章　安土桃山時代

第一節　總說

此時代は織田信長の上洛(一三三八——永錄十一年)より豐臣秀吉の死去(一三五八——慶長三年)に到る三十年間を指すのである、僅かに三十年間であるけれども國史上よりせば非常なる時期であつた、

鄉土史よりするも又然りである、今少しく戰國の大勢を記して其所以を示したいと思ふ。

抑も室町の季世政權は下に移り幕府は其弱點を暴露してしまひ天子將軍は勿論管領の如きも尸位を擁するのみとなつた、茲に於てか天下亂麻の如く亂れ合戰止む時も無かるべしと云ふ形勢であつた、即ち三好氏京畿に屈起して一時能く朝を稱したのであつた、織田氏の如きも當時尾張斯波家の被官として幾分か勢を得て居たが、僅かに自立し上洛して將軍に謁した時は三好氏の鼻息を窺ふた次第であつたのである。

然るに三好氏は長慶死して後内訌起りて殆ど一和せず、遂に織田氏の上洛するや散亂して又立を得ず、且織田氏と默契ある長曾我部氏の阿波に入るありて愈々其根基を失ひ、遂に滅亡してしまつた。

如斯きは元より、時なり命なりとも云べきものであるが、一面國人の氣風が自然と歷史との感化を享けて其大を天下に爲すには餘りに智慧のありすぎた爲であるかも知れぬ、當時の軍事探偵の觀察を人國記と云ふ書より拔萃すると思ひ當る筋も無いではない樣である。

曰く、『大體氣すこやかにして智もあり屈きたる意十人に七八人もある如きなり然れ共智あるを忘却して變道を行ふ事ある可しされ共人を殺し强盜抔の類は定めてあるまじきなり武士の風俗最もかくの如くして意地强し然りと云へ共智却て仇となるべし厩植名東名西は形儀一なり勝浦那賀板野阿波はやゝ心細きか云々と。

第二節　織田氏の上洛

A　緒言

地の利を占め人の和を得たる織田信長は遂に上洛を企てた、天子の密勅は下り、足利義照は彼に投した、尾濃の平原に百戰を經たる彼の軍隊の前には組織も戰術も幼稚なるものを以て抗拒するは不可能である、

三好の一派は信長の背後に武田上杉北條あり前に淺井朝倉六角佐々木あるを重視して上洛の容易でない事を確信し相變らず内訌を重ねて居つた、然るに時は維れ永錄十一年信長は義照を奉じて難なく京洛に進み寄つた、茲に於て相結べる三好義繼松永久秀の一派は先づ徐ろに天下の形勢を待つて謀る所あらんと云ふ調畧的態度を決し、久秀の如き先には私かに人をして義照を近江に匿れし頃暗殺せしめんとした事なぞをくびにも出さなかつたのであつた。

之に對する三好三人衆の一派殊に岩成友道等は先づ戰ひて諸侯の向背を視んと云ふ主戰的態度に出で、阿波の諸將も之に加る事とした、乍然信長の上洛は餘り急であつたから防戰の準備は充分でなかつた。

今私は此調畧派と主戰派との取つた史蹟を分記してみよふ。

B　調略派の滅亡

永錄十一年織田信長は愈々上洛した、松永久秀先づ途に迎へて之に降つた、義照は兄義輝將軍の仇なるを以て討んとしたが信長は天下の平安を願みて暫く許さん事を乞ひ、大和半國三十萬石を安堵して信貴城に居るを許したのであつた、

三好義繼も又降つた、彼は義照には妹聟に當るから卽ち許されて河內五萬石高屋城に主たるを得た

其他信長に降りし三好黨の中には三好康長の如き十河存保の如きものがあつた。

かくて京畿に於て三好一派の主戰派と信長との衝突ありしも結局信長の勢力は確固として拔く可からざるに到つた、而して義照も一先づ足利十五代の將軍に任じ公方たるを得たのであつた、然しながら信長の企圖は之から尤もデリケートな時期に入つたのであつた。

元龜二年（一二三二）の頃である、信長は事を以て義照を激せしめた、義照卽ち信長を計た、事露れて遂に京師を逐れ妹聟義繼に依る事となつた、卽ち足利氏は亡んでしまつた、室町時代は過去の果敢ない思ひ出にすぎなくなつたのである。

さはれ義照とてなか〳〵に隱謀を止る可くもなかつた、三好黨は元より武田氏毛利氏朝倉氏淺井氏さては本願寺叡山など利用し得可きは利用し、野田福島の合戰、三方原の合戰など、屢々信長を危地に陷れ得た、乍然信長の勢力は依然として强固である、却て義照は迫れて毛利氏に奔り義繼は其城に攻められて遂に自殺した。

義繼の戰死、之卽ち三好宗家の滅亡を意味するのである、但其子孫は後に德川氏に仕へたと云ふ事である。

松永久秀は之より先き寶器或は持城を信長に奉りひたすら信認を得んとしたが、元龜二年義繼の亡さるゝや其身又危險を感ずるに到つた、三好成立記に『三好修理大夫長慶死後元龜二年義繼も死しけるが亂國の最中なれば隱之松彈相謀りて所々を守る』、『左わらぬ程には乍有臨深淵踏薄氷心地して世の景氣をぞみられける』。

かくて久秀は面從して天王寺に在陣して居たが遂に信貴城に據りて反形を露した、之實に信長が隱に激怒して期待せし所とて忽ち兵を遣して攻め亡してしまつた實に之天正五年（一二三七）の十月十日であつた。

私は松永久秀に就て尙少しく附記する考である、元彼は西國の賈人だとも洛西西岡の人だとも將阿波の人だとも傳へて居る、三十歳にして字を習ひ、長慶に仕へて家宰となり忽ち專權して天下の實權を握つた、兎にかく一個の英雄であつた。

彼は國にあつて家宰たる時も攝津守護代として高槻に館した時も將所司代として洛中を奉行した時も頗る政治的手腕を振つて上は天子將軍主君に對し下は士民に對し其信賴を受け得た者である、如斯

して彼の勢力は增進し彼の武力は擴張された。

彼は堅法華である、當時のキリスト敎に反對して三好の一派が之を信ずるのを好まなかつた樣である、長慶死後の內訌も之も一因であつたらしい、又彼は禪を好み相國寺の大檀那であつた。

彼は讃岐に亡命せる楠氏の一族の爲朝廷に乞ふて朝敵の名をのがれしめた、之はやがて彼が足利將軍を討て尙悔ひざりし心奧の見識が何でありしかを暗示するものでは無かろをか、時代もある境遇もある。乍然此の狡猾なる爺にも一片南朝の末路を悲む心意の動いた事も無いとは云へぬ。

彼は又美術を愛し文學を好んだ、霜臺の名は誰も知る、彼の松永貞德は實に彼の遺子である。又今京師に彼の子孫あり彼の遺物遺器を傳へて居るのである。

彼は戰爭も上手であつた、西洋の武器西洋の築城術を利用したのも彼である、彼は彼の天主臺や多聞作りと稱する筑城法を發明したのであつた、又信貴城に籠るや三月を保つた。

彼の調略も又可なりのものであつた、永錄十二年既に武田信玄と通じて信長の背後に事あらしめんとせし顚末は武田信玄考に精しい、

又元龜二年に信玄の使を得て愈々隱に三方が原の戰に便したる、彼の反せしも又上杉謙信の上洛を期待したからであつた。

尤もかくなれば信長も許るす事も出來ないであろをが、久秀も蛇の如き信長の執念を知つては到底大和の領主として平和を樂み得可き望はない、實に絕對絕命であつたかも知れぬ、三成は忠臣となり光秀は同情せられた、

這個久秀の愛せられざるは、其器小にして其行實が心裡微妙の覺悟を藏して居ても人が察するには餘りに陰險であつたからであろを。

C　主戰派の敗亡

信長の上洛は永錄十一年九月二十九日であつた、初め主戰派も信長の豫想よりは急に上洛したから頗る狼狽して各城に籠つたけれども出來なかつた。

岩成友道は一千の兵を以て靑龍寺(山城乙訓)に籠城したが保つ能はず僞り降つて其先鋒となり芥川城に入り再び反した、芥川城には細川晴元の子照元を奉じて三好日向守長逸(長錄入道北齋)二千の兵を以て守つて居たから合して三千頗る振つたが、信長の軍之を攻むるや夜に入つて退散してしまつた。

十月一日、信長將軍を奉じて芥川城に入つた其翌池田城降り、引き續き越水城生田城瀧山城風をのどんで落去した。

此時にあたり細川眞之三好長治等は大兵を具して高槻に進み富田普門寺に陣して居たが戰ふに及ばずして本國に去つた、將軍義榮は急去越水城に居たが急に病み阿波に去り撫養に於て薨じた。

十月二十二日に到つて京畿全く鎮定し信長京師にかへり參内して平定を奏し安土に去つて、此の間松永久秀は寶器つくもかみを信長に献上した。

かくて主戦派は一敗地にまみれたが忽ち再擧した、即ち將軍義照の館を襲ふたのは例の岩成友道を初め三好下野守政康矢野伯耆守矢野和泉守篠原玄蕃充等阿波諸將を合して一萬の兵攝河泉の調略派の持城をぬき遂に茲に到つたのである、實に是永錄十二年正月二日であつた。

所司代羽柴秀吉は兵三千を以て之を迎へ頗る苦戦に及んだ、調略派の兵主戦派の退路をおびやかしたから遂に敗れざるを得た。

信長即ち上洛し二條城を修した。

主戦派はかくて退軍して阿波に去つたが如何にもして勢力を恢復せんとし遂に野田福島の城を修して關西を保たんと企てた、此間に信長は主戦派に後援せる堺の富豪を打んとしたが秀吉之を許さん事を乞ふた、此時堺の政所には十河存保あり、秀吉の帷幄には三好康長居た樣である、即ち堺攻は中止せられた。

さはれ元龜元年に到つて野田福島の城には池田氏本願寺の通ずるあり毛利氏武田氏も間接に援けた本城は細川照元三好長治氏三好政康其三好黨一萬三千人之を守り、織田信長も大兵を親く率ひて攻めた容易に勝たず、加之朝倉氏の俄かに兵を起すありて信長も一時危態に陥つた、僅かに勅命を乞ふて朝倉氏と和し再び城を攻めた、然るに再び淺井朝倉等の牽制するより一先づ圍をといた。

乍然主戦派も勢つきて一先づ武名を天下に揚げたと云ふに止まりて阿波に引き取つた。

元龜二年義榮亡び天正五年久秀は亡び調略派も主戦派と同じ敗亡の跡を追ふたので茲に京畿にをける三好黨の勢力は一掃せられてしまつたと申して差支ない、而して天正四年以來長曾我部元親土佐より阿波に侵入し阿波三好黨も滅亡するに到り、鄕土吏中のダークエーヂを現じた、いでや節を改めて小究する事とはしよう。

第三節　長曾我部氏の侵畧

A　緒言

長曾我部氏は其先明ならず國司一條氏の下に附ていたが元親に到つて遂に土佐を一統し兵を豫讃阿に試みんとした、依て信長の上洛が前以て風聞せられし頃使を信長に遣し方物を奉り明智光秀の介に依り四國占領の許を得且一子に偏名を得て信親と稱せしめた、之は信長に取つては京畿三好黨の根據を衝くの調畧手段であつたかも知れぬ。

かくて元親は其企圖を進めていたが元龜二年信長京畿に其權勢を確立するや武田信玄取て以て更らんとし使を四方に派して連衡を策した、此時三好松永の一派も之に應じた、元親も又之を默契した、元親はかくて南海を徇へて後更に天下を狙度せんと思ふて居たのである。

さて茲に元親をして其企圖を行はしむる絶好の機會があつた卽ち阿波將士の內訌之である、初め三好義賢の久米田に戰死するや其子長治つぎ阿波屋形細川眞之の執事となつて居つた、而て京畿の三好黨が信長が爲凋落を餘儀なくされ元龜二年には三好義繼も討死したから松永久秀は心安からず三好長治に通じて諸將諸城を守りて俱に共に一和を期したのである、此時の諸城將は次の如くである。

勝端城　三好長治、三好越後守、三好豐岐守、矢野駿河守、山田陸太夫、犬伏左近、河井左馬充、大岡强之永等

木津城　篠原肥前守　久保崎城　馬詰駿河守　川端城　川端越前守
脇城　武田上野介　岩倉城　三好德太郎　重淸城　重淸豐後守
白地城　大西山雲守　足代城　三好備前守　金丸城　阿佐紀伊守
山口城　篠原三河守　三谷城　鹽田左近丞　穴吹城　細川眞之
上野城　北條越前守　川田城　戶井兵部充　浦上櫻城　篠原彈正
一宮城　一宮長門守　今切城　篠原玄蕃充　寺島城　福永佐渡守
渭山城　森飛彈守　仁宇城　伊豆守正廣　岡城　新田遠江守
桑野城　河內守康明　日和佐城　和泉守友高　油岐城　隱岐守有與
木岐城　大膳大夫正持　淺川城　兵庫守有長　海部城　左近將監友充

尙阿波以外にあるものは次の如し

十河城　十河一存　瀧宮城　豐後守氏康
二條城　三好左衞門尉、三好日向守、三好鈎閑齋等　淀城　岩成主稅
大阪城　篠原太和守　野田城　三好新左衞門、三好爲三、東條紀伊守等
芥川城　篠原市之進　奈良城　何　某　信貴城　松永彈正久秀

然るに三好長治は若くして意滿ち猥りに兵を髓岐に動かし又重臣篠原彈正を亡したから將士も服せず、屋形眞之も入つて勝端に居たが去て福原出羽守をたのみ仁宇山城に籠つた、一宮成助は松永調略に依て將軍たらんとし平島公方と戰ひし以來其調停者三好長治等に反感をいだきをりしが、長治が仁宇山城を攻めんとて新野に軍するや、忽ち長曾我部元親に通じて援を得長治の陣を俄に襲ひ追ふて遂に殺すに到つた、阿波將齋記に曰く『土州長曾我部宮內少輔元親は阿波國三好家の同志爭ひを幸と思ふ所に一宮長門守成助かたより一味すべき由申越によつて人數四五千にて天正四年阿州海部迄せめ入り同じき五年の春三好長春を打取りし由成助かたより注進あり其のかた兩方の諸侍大かた元親につくしける故同年仁宇桑野迄せめ入り桑野の城要害きびしく又はたや山にも城を構へ野伏二百宛相添へ桑野吉明にあづけ元親は土州へかへりけり』云々と、いで其序を南北郡の侵略に分ちて記しみん。

B　南郡侵略

(一)緒言　土佐より阿波に入る二路あり一は三好の山谷より吉野川に添ふて進出し以て北郡を制すべく、他は海部の荒磯に沿ふて那賀川勝浦川の沿岸一帶に出ず、元より何れをとるとも山嶽重巒し之を守るに道を以てせば容易に過ぐ可からざる要害であるが元親は先づ阿波將士の內訌に乘じて南郡を占めんとした。

(二)島彌九郎の死　元親の侵畧は兼ねがね風聞せられて居たとみへ、永錄十一年の春元親の弟彌九郎親房は病を京に養はんと兵習三十と舟を海部鞆の浦に泊めた時、海部城主は之を軍探となし夜襲し擊殺した、かくなれば元親も愈々決意する外はなかつたのである。

(三)海部城の落去　天正四年元親は兵五千を以て海部城を急攻した、恰も城主將監友充は讃岐の兵事に任じ居て淺兵僅かに鈴が峰の險を約し弓銃を發して禦いだが、土將黑岩治郎左衞門不死身を以て任じ奮鬪躍進し來り衆寡敵せず落城した、茲に於て木岐淺川油岐日和佐等の諸城風をのぞんで落去した。

(四)東條關兵衞の籠城　關兵衞は那賀の西方城主である、土兵の之を圍むや能く禦いで武名を鳴らした、元親止を得ず策して和を講じ其族久武親直の女を嫁せしめる事にした。

(五)新開道喜の武勇　道喜は富岡の城主である獨り武勇を誇て關兵衞と相下らず、西方城を再三攻めた、關兵衞依て土佐に援を得漸く勝て之をも元親に屬せしめた、元親は此間に仁宇桑野迄攻入り桑野城を修し兵を置いて守とし一先ず土佐へ歸つたのである。

かくて南郡は占領されてしまつた。

G　北郡侵略

(一)緒言　元親は南郡を經略せる間にも尙白地城主大西覺養をして北郡侵略の素地を成さしめた、覺養は其族の土佐に厚遇せられしより志を通じたのである、此白地城は昔大西氏の祖が孤城を以て細川の大軍をさゝへた要害で伊讃阿に通ずる衝に當る所、此處に座せば以て臨機四方に兵を紳縮し得る所である、さて此の事は天正四年の頃である。

(二)大西覺養の詭計　覺養はかくて元親の爲に計し重淸城主重淸豐後守を訪ひて俄かに之を殺し其封を奪つた、茲に於て元親は坐して北郡の半を收めたのであつた。

(三)十河存保の下國　三好長治死して嗣なきを以て存保は堺の政所たるを辭し下國して勝端に居り、先づ元親に通せし一宮成助を破つて山中に逐ひ、次で覺養の事あるや之を攻めて降し、忽ち誘殺したしかし元親兵を出したから美馬三好依然として恢復するを得ず、勝端に退ひた、之天正六年の事である。

(四)猪尻崩れ　三好成立記によれば『かくて暫く世靜まり悉く存保に從ひけゝ山方は去年の秋より成助につくと云へ共里々は何れも存保治め給ひける』と云ふ程であつた、然るに脇城主武田上野介岩倉城主三好德太郎等横田蘆田三橋等の諸士と計り天正七年十二月二十六日使を存保に遣して曰く、吾等

元親に下る止を得ざりしなり近日元親等歸國せんとす乞ふ策する所あれと、依て存保は森飛彈守三好越後守河村左近充等と兵を率ひて二十七日早曉脇城迄進んだのであつた。

憐む可し伏兵俄かに城側より起り遂に大敗するに到つた、存保は僅かに身を以てまぬがれたが、矢野駿河守の首は加藤主水に河村左近充の首は宇山彌市郎に森飛彈守の首は美間助七に之を得られた、其他存保方なる三好越後守戸井新左衛門鴨島六之進久次米與右衛門川島兵衛厩植志摩守内原菊大夫飯尾久左衛門等亂軍の内に討死した。

(五)存保讃岐に去る　茲に於て一宮成助は山中を出で一宮城にかへり頗る勢あり、存保又安ずるを得ず讃岐に去つたから兵を勝端に入れ一旦阿波は長曾我部黨のものとなつた、之天正八年正月三日であつた。

D　元親阿波を克服す

(一)緒言　茲に三好康長入道笑岩は早く織田氏に從ふて居たが其領する美馬三好元親に奪はれし故以て信長に乞ふ所あり、信長も元親の南海を收むるを喜ばず使して元親を諭し南郡以外を犯さゝらん事を以てした、元親之に省せず、即ち織田氏長曾我部氏の相對する事となつた。

(二)康長及び存保の下國　信長先づ中國陣の羽柴秀吉に命して淡路に兵を出さしめ更らに阿波を窺はしめた、次いで阿波の將士中三好氏を思ふ者存保を迎へしかば信長の先陣として康長と共に阿波に下つて再び勝端城に入つた。

天正九年の夏存保は紀淡の兵を得て一宮城を攻めた、何さま笑岩の信長の先陣たるを聞て將士の與するもの少なからず、一宮成助も陰に通じて開城した。

(三)中島の對陣　信長と元親との外交關係の斷絶は信長公記によれば天正九年二月であつた、即ち笑岩は讃岐に下り存保を具して阿波に入つた而して一宮城を攻めた、此時信長は次子信孝を主將とし堺に軍を艤せしめ續々發向せんとした。

依て九月元親は先づ久松親秋と兵二萬を附して阿波に入らしめた、存保即ち退きて奥野に陣した、成助忽ち親秋を中島に迎へ更らに兵一千を以て先陣となり中富に進んだ、篠原自遁又兵二千を以て之に應じ勝興寺表に陣した、やがて全軍黑田に進み川を隔てゝ存保康長の軍と對した、されど日暮れければ一先づ相分れたのである。

さる程に信孝の兵不日着すべければとて土佐軍所在の三好黨を攻め其據る所を固めんとした、藤城主近藤正次も十一月十五日より十六日迄は城を保ち奇勝を得た事もあつたが遂に落去した、無論背卷の援軍がなかつた爲である、存保康長は忍んで信孝を待て居た。

(四)本能寺の變　三好成立記に曰く『京都より飛脚到來六月二日明智光秀逆心により本能寺に御自害の由也三好山城いそぎ上洛す』と吁之天正十年六月二日の事である、茲に於て局面は一變した、實に

一面した但山城とは康長の事である。

(五)中富川の決戰　天正十年の夏八月長曾我部元親は大擧して三好氏を覆さんと企てた、卽ち其二十七日長曾我部親康親吉は中島に陣し二十八日黑田の原に進出した、此時一宮成助桑野吉明等降將は先陣となり、元親は手兵六千を以て殿となり、總勢二萬江を隔てゝ三好軍と相對したのであつた。

三好存保又精兵五千を以て三隊となし之に向ひ本陣を勝與寺表に堅めた、かくて相接戰するや劍戟相磨し血河屍山の狀を呈したが存保の尖兵二千急に勝て江を超へて敵を中斷せんとした、然るに河水急に漲り溺れ討るゝ者數を知らず、引て總軍大敗してあへなくも士兵の蹂躪に委ねた故存保も自殺せんとしたが將士とゞめて勝端城に入らしめた、蓋元親策して江をせき置きしものである。

此役は三好家興廢の決する所とて戰國の一大戰であつた、今三好方の戰死者の主なる者を記すと次の如くである。

赤澤宗傳父子西條益太夫馬詰三四郎岡甚之丞七條孫次郎板東肥前守兄弟三好某竹內笹太夫佐藤久左衞門安養寺左馬介瀨部喜左衞門原田久左衞門高志右近淸久三之丞內藤助太夫奈良太郎平鎌田九馬左衞門鈴江新平古川龜衞門片山岸右衞門角田捨太夫田村岩左衞門粟飯原平之丞石川六之丞櫛淵左近濁淺豐後守新名川洲右衞門宇奈世龜之進芥川兵庫四宮外記由木善右衞門右津竹右衞門中庄主膳延野兵衞進等卽ち之である。

(六)勝端城の陷落　元親は引續き勝端城を圍んだ、元來方一二町に足らぬ小城であるが必死の防戰に中々落城せず、頗る攻めあぐんだ。

頃しも九月七日、秋雨の降りつもりてや例の洪水あり、士兵も城兵も共に苦んだ、殊に城兵は糧食盡きて保つを得ず、元親依て存保の讃岐に入るを許し城を開しめた、之れ九月二十一日の事である。

篠原自遁は初め三好に從ひしも反して元親に附きしが又反して三好を扶け、勝端の陷るや領をすてて淡路に去つた。

(七)長曾我部の阿波　元親阿波を得て諸將を木津渭山脇白地岡蔀等に置き、自らは名東八萬夷山城に陣す、成立記曰く、『四國を橫領して諸人敬威事吹風に靡草木如し』と、彼實に阿波に出でざる時は伊讃に出でゝ攻代に從ひ遂に四國を得たのであつた。

彼阿波を得るや忽ち降將を除かんとし先づ新開道喜に勝浦郡を給はんとぞ云ひ招じて勝浦郡丈六寺に迎へしめ、久松秋親をして饗せしむ、道喜既に飽醉して歸らんとす、士あり俄に之を切る、道喜の從士梅田新兵衞あり士を切て又自も殺さる、兵間もなく富岡城を攻む卽ち落つ、之天正十年九月十六日であつた。

かくて其十一日七日元親一宮成助を呼び夷山城に殺した、而て元親は土佐に去つた。

斯して天正十年(二二四二)より十三年(二二四)迄長曾我部氏阿波を領し百姓兵衆山土地頭のきらひ

なく誅求を逞くし敬々勝者の權威を振舞つた、神社佛閣堂塔伽藍多くは此際侵畧者に依て燒却せられたのであると云ふ事である。

天正十三年豐臣秀吉は撥亂反正の勢を以て長曾我部元親を克服し阿波を蜂須賀氏に給ふた、蜂須賀氏治を努めたから忽ち懷いた、之元親の下に途炭の苦をしたる反動でもあつたろをと思はれる。

第四節　三好氏の滅亡

A　緒言

私は今改めて三好氏の滅亡に就て少しく述べる事にする、抑も三好氏の滅亡は信長の上洛以來只時の問題であつた、元親の侵入するに到りて漸次逼迫し三好氏も長治存保等相次いで之の暴雨（ストーム）を耐へんとしたが其甲斐もなく倒れたのも是非なき次第であつた。

B　長治

三好義賢の細川持隆を殺し其妾小少將を奪ひ生しめしもの卽ち長治なり、父の討死せし頃は六七歲久秀の義輝を弑せし時は十一二歲信長の上洛するや諸將に奉せられて富田普門寺に陣せしは十五六歲義輝亡びて久秀と計り諸城を守りし頃は十八九であつた。

天正元年の頃木津の城主篠原自遁は長治の母なる小少將と通じ頗る專恣であつたから同族篠原彈正紫雲之を諫めた、小少將は西條城主岡本美濃守より出でた者であり旁々ひをく倣て居たから、大に憤り紫雲を其の居城浦上櫻城に退けた。

長治は十河存保を大將とし井澤左近太夫森飛彈守等を附し阿淡の兵三千を以て之を攻めしめた、紫雲も是非なく之を迎へ大に奮戰し遂に力つきて一族悉く戰亡した。

之より長治頗る將士の心を失つた上に上方より下れる穢多を小姓とし其家を取立てたる如き、讃岐の將士の傾を橫しませんとして兵を出せし如き、或は日蓮宗を强行せんとしたる如き、主君にして異父兄なる細川眞之を發ばざる如き、益々家運の末を現した。

天正四年眞之は遂に勝端を出でゝ福原出羽守をたのみ仁宇城に據つた時に十二月五日である、舊功の士大粟右近服部因幡森監物粟田宇左衞門中津六郎左衞門等之を奉じ一宮氏伊澤氏の如きも忽ち三好氏を去つて長曾我部氏に通じ南郡を侵畧せしめた、恐くは非三好黨が長曾我部氏を引て援とし眞之を誘ひて一番芝居を打たんと企てたのであるを。

天正五年の春三月長治は兵を發して新田野に在陣した、仁宇は難所なる故寄る事もかなはず時日を送つて居た、茲に一宮成助伊澤賴俊は兵を以て其後方をゝびやかした、長治止むを得ず逃れて今切城に入り篠原玄蕃充と相語り再擧を計り居りし所を眞之を大將として一宮成助伊澤賴俊吉井左衞門太夫行康多田筑前守吉次等二千の兵を以て今切城に押寄せたから、此處にも居たゝまれず急を森四宮等の海賊にはせ別宮に奔つた、篠原玄蕃充も奔て家臣那勘介の家に到り古井戸の中に匿れたのを勘介之を知

らしめたから忽ち殺された。

長治は別宮に到り海賊の救船を待て居たが其船は朝霧に誤られて佐古川に入つたから待つ甲斐もなく、其間に敵差迫つたから一民舍に匿れた、然るに眞に運の盡きとも云ふ可きか、里人の内にかつて長治放鷹の時無禮打にあひし菜賣の一族ありて之を敵に通じたから、即ち萬事休焉、長治辭世を殘して曰く、『みよし野の梢の雪と散る花を長き春とや人の云ふらむ』と、三月二十八日の朝であつた。

伊澤一宮の勢かくて大に振ひ殊に伊澤は板西城を修して之に據らんとした、三好恩顧の將矢野駿河守三好越後守は何げなく之を川原遊びに誘ひて殺し忽ち兵として居城早淵城を圍んだ、三好某は伊澤の知音なりしかば七條より急をきゝて奔せ早淵に到り妻子を扶けて一宮に送つた、之四月二十四日であつた。

四月二十五日、朝霞する裡に一宮成助の兵は住吉に進んだが川深くして渡るを得ず、矢野駿河守同備後守三好越後守森飛彈守赤澤信濃守篠原自遁等も兵を出したが、薄暮に到つて物分となつた、其後對峙して決せざりしが、夏九月に到り、八日一宮兵を出して下町八幡より富田を廻り助任をわたり高崎に出でしも又決戰せず、退いて延命に到る敵兵俄かに籔より出で襲ひしかば敗走して一宮の謀將穴山梅雪も討死をなし、之が爲一宮の勢一頓挫してしまつた。

さる程に矢野駿河守篠原自遁は三千の兵に將として桑野に向ひ眞之及び元親にむかひしが、先陣の淡路兵敗るゝと聞き退きて勝浦郡に到る、敵兵寄りしたひて五百に及ぶ、駿河守舊闘之を丈六寺に追ひ込み船を得て勝端に返り、更に兵七千を以て一宮城を攻めた、成助保つを得ずして大粟山の奥に入つた。

茲に於て國に守護人なくてはと十河存保を迎へる事となつたのではある。

十河存保

存保は長慶の弟十河一存の子である信長に從ひ堺の政所に代官たりしが長治死して國に守護なきを以て阿波に下つた、然るに篠原自遁は三好氏の亡び一宮氏の弃れるを以て已に利とし存保の入部を妨げしかば存保大に怒りて之と戰はんとした、大代掃部之を調停して存保は即ち勝端城に入つた、之天正六年正月三日であつた、自遁之より元親に通ずる傾があつたが後果して元親に附いた。

之より先大西覺養元親に通じて重清氏を滅した、存保茲に先づ兵を動かして之を平げた、當時の落書に曰く『大西の年賴武の末の子は打碎れて耻を覺養』、かくて暫く小康を得、一宮氏には仁宇山勝浦山海部の山士衆一味せるも里分は存保之を治めて居つた。

天正七年の末に到り、脇城主武田上野介等僞り謀つて存保の軍を誘殺し之が爲存保の勢は一頓挫した、一宮成助も燒山寺山より出でゝ一宮城に入り正に事あらんとした、翌八年正月一宮氏勝端城内の庄野和泉同右近等に内應をすゝめし事露れければ存保其の保ち難きを知り讃岐に去つた、一宮成助依

て兵を勝端城に入れ篠原自遁又之に應じた。

茲に木津の侍に篠原九兵衛と云ふ者ありいたく三好氏の凋落を悲み泣いて一族を説き、再び存保を迎へんとした、恰も此時に當り三好山城守康長入道笑岩は織田信長の先鋒を承り讃岐迄下て居たから、笑岩存保共に阿波に來り勝端城を復し一宮城を攻めた。

元親之を聞き久松親康をして之を救はしめ両軍黒田に對陣したが未だ戰機熟せなかつたのである、天正十年六月二日、本能寺の變あるや元親之に乘じて大擧し來り、八月二十八日の中富川合戰、九月二十一日の勝端落城となり、存保は讃岐に去り十河城に入つた。

存保は後又元親と戰ふたが秀吉の四國を平定するや五萬石にて舊領を得た、九州の役存保等島津軍と戰ひ討死した、嗣子千松丸早く死して家亡んだのである、但し次子存純の子存繼に到りて備前池田侯に仕へたと云ふ。

D　三好氏の流離分散

元親阿波を得てより新開道喜一宮成助等を除き、次で細川眞之を仁宇に攻めた、眞之は伊澤亡びし後あるかひも無く仁宇に居たが遂に江彦治郎本木新左衛門江村兵衛蹉口兵庫等之を攻め茨岡に自刎せしめた。

此後三好氏の流離分散たるや頗る慘たるものがあつた樣である、乍然三好山城守康長の笑岩は恐く

は羽柴秀吉に寄り居たらしい、元和元年七月五日大阪落城の時亡びし大名に三好丹波守一萬石がある或は其後であろをか、之より先太閤征韓の砌り名古屋城留守在陣の衆に馬廻衆二番河井組に三好孫九郎三好爲三三好新右衛門尉あり、五番尼子組に三好助左衛門あり、德川二代將軍が淺井勝政をして三好左馬助と稱せしめしは先にお伽とせし老武者三好下野守？の後をつがしめしものならんか。

第五節　豐臣氏の南征

A　緒言

元親の四國を得んとするや明智光秀により信長に乞ふた、而て笑岩の舊領を復せん爲信長に乞ふた時は羽柴秀吉に依たものでないかと思はれる。

笑岩卽ち三好康長は秀吉の妹智たる三好武藏守一路（後に武藏法印）と同一人又は近親であるらしい、私は寧ろ同一人と信ずるので康長は信長の上洛するや之に降り秀吉の所司代たる頃に相婚して子秀次を生んだものであろをと思ふ、秀次は後に三好孫七郎から豐臣秀次となり、關白の位を忝なくした、彼は彼が豐臣氏南征の主將となるや特に康長の舊領たる岩倉城を攻めた、太閤記には之を康長の子なればと記してをる次第である。

但し康長の末路は殆ど知れぬ秀吉の鄕里愛智中村に隱逃して死んだものらしい。

それはさてをき、笑岩の訴へし所は秀吉の説きしものか、信長愈々先約を取消して元親に北郡を犯さゝらん事を以てした、元親之をきかない、忽ち神戸三七郎信孝一軍に將となり南征の用意を始め康長先陣を承り阿波に入つた、秀吉又中國より淡阿に兵を向けて之をうかがをた。

時なるかな、光秀は信長を本能寺に圍んで自刎せしめたのであつた、元親は之に乘じて阿波を專檀した、秀吉は之に乘じて天下を掌握した、乘せし機會は同じであるが依て爲さんとする所は相反せざるを得ぬ、秀吉は毛利氏と結び、元親は根來雜賀の一揆と結び秀吉が小牧に家康と戰ふや之等の一揆を益々煽動し一方使を家康に遣り挾擊を約せんとした、秀吉卽ち家康と和した、後家康茲に初めて此使を得て時機を去らぬと欺したと云ふ事である。

秀吉はかくて德川氏と和して兵を返し根來雜賀を鎭定し正に南海に事あらんと企てた、元親之を救ふ能はず使を秀吉に送り改めて疎遠を謝し四國を以て乞ふ所をのべた、秀吉許るさず元親又從はず、茲に豐臣氏の南征あるに到つたのであつた。

B　南征と阿波

(一)緒言　豐臣氏の南征は伊讃阿の三面よりしたので三面に於て合戰があつた、乍然此時元親は阿波國白地城にあり主力を集中し遊軍を信親に與へて伊讃に出沒せしめ、結局敵を阿波の山峽に誘ひ寄せて打破らん決心であつたらしい、從て四國征伐は阿波征伐とも見る可きものであつた、今阿波に於ける防禦軍の配置を記すと次の如くである。

海部城	長曾我部親康	?
木津城	東條關兵衛	五〇〇〇
一宮城	江村彌左衛門 谷忠兵衛	一〇〇〇〇
岩倉城	福原集人	五〇〇〇
脇城	長曾我部親吉	?
白地城	長曾我部元親	?
本國	長曾我部盛親	一〇〇〇〇

(二)南征軍の戰略　豐臣秀吉は淡路紀伊等の水師により海上權を握り自ちは堺に出でゝ親征を聲言し秀次を讃岐より毛利氏を伊豫より入らしめ、秀長を阿波に向はしめた、此全軍八萬五千人であつた。

(三)木津城の籠城　秀長の軍は天正十三年四月二十五日淡路より撫養に入り木津城に對して泊城を修して據つた、其雌堀には蜂須賀家政藤堂高虎あり卽ち策して城を攻めた、城將東條關兵衛能く之を禦ぎ八晝夜に及んだが遂に水を絶たれしかば開城した、此事元親の怒る所となり關兵衛土佐にて自殺せしめられた。

(四)南郡の威赫戰　木津落城の後秀次は讃岐より阿波に入り秀長の軍と合した、之元親白地に主力を

集め居るを知りし爲である、秀次秀長共に一宮城を攻めんとし先づ秀次の謀將黑田好孝策して兵を遣し富岡城を攻め更らに海部の諸城にせまらんとせしめた、親康卽ち去て本國隊と合した。

(五)岩倉城の陷落　其後南征軍にては軍議決し秀次は三好康長の子なれば特に康長の舊領たる美馬三好を撰み直に自地に向つて進む事となつた、其本隊脇城に迫るや親吉退却するを一宇の土藥之を殺してしまつた、依て康長の舊城岩倉を圍むと守將能く禦ぐので銃樓を作くりて之を攻めた、元親信親の遊軍を迎へて援はしめんとしたが未だ着せざるに本城は陷落した。

(六)一宮城の第一攻擊　秀長は此時四十八歲戰になれたる大將である、天正十三年の夏五月二十六日早曉、城をはなるゝ十町の地に陣せしが其夜機畧銳き谷の夜襲を豫め備へて退け、二十七日に到り總攻擊を加へた、城兵又よく守りしが稍く附入にして外郭の一部を得た、此時藤堂高虎も親しく白戰したと云ふ。

(七)第二攻擊　又引續いて總攻擊を加へ、蜂須賀家政の臣長井牛之介あり尤も奮戰して勇陣中に鳴つた、しかし遂に得なかつた、七月二十五日城將谷夜襲を試みしが破れて城に入る能はず間行して白地に去り江村一人之を保ちて尙屈せなかつた。

(八)講和　此時にあたり加藤清正等伊豫より土佐に入り元親の本國をゝびやかすあり、秀吉直屬の兵は一部既に海を超へて土佐の沿海に上陸せんと擬した、茲に於て秀長機なりとなし書を江村に遣して和を議するに到つた、江村依て秀長に降り元親の封を乞ひしかば秀長卽ち許るして一宮を開城せしめた、江村依て白地に向ひ元親を說く所あらんとした。

C　長曾我部氏の阿波退去

元親は元より戰國の一英雄である戰ひて後和せんとした迄であるが江村の忠言には表に從ふ可くもなかつた、乍然遂に重臣の乞ふ所により一決して降を乞ふ事とし旨を以て秀長に答ふると共に若し許るされずば亡ぶ可きなりとて土佐に去つた、和卽ち成る、長曾我部覺書により和約を援錄すると次の如くである。

一、長曾我部殿身上之義土州一國於而御斷儀隨分不可有疎略事付內府御恩同心無之付者非疎略事

一、五日之間矢留之事雖無分別候各達而被自候間是又得其意事

一、如此之上者杖公事表裏聟有之間敷候事

七月二十五日　　美濃守秀長花押

實際此役元親は豫期した程に勝て武名を擧ぐる事は出來なかつた、且終りに兵氣の沮喪したのは同覺書に記して、『その節城中よりも軍勢出合所上方勢は第一馬太く物の具等も花やかに千騎二千騎にも相みゆる由又四國勢は第一馬細く物具等も佗敢く千騎か五百騎にも相見ゆ由傳へ承り候』とある。

かくて後元親は父子上洛して大阪城に秀吉の饗を受け厚遇をせられた、而て子信親は質として大阪

に留められた、其後九州征伐の時元親信親等存保と共に先發したが仙石權兵衛の驍勇にして好戰なる進軍に累して島津軍と戰ひ信親は戰死し元親僅かに逃れ得た。

第六節　結　論

眞書太閤記に曰く、『此國(阿波)百姓の上に兵衆あり兵衆の上に山士あり山士の上に地頭ありとかや百姓は耕作をつとめて夫と傳馬を出だす兵衆は山士にしたがふて出陣し山士は山々一峰を領して其の下の兵衆と百姓をいつくしむ事中國の比にあらず』と之實に安土桃山時代に於ける社會組織なり。

老人雜話に曰く、『阿波の老父語りて曰く阿波の國は邊鄙の山國なれば刀脇指とても世間の結構なる物の如きは十人に一人も不成して山刀とて樺卷の鞘にて蔓卷の柄なるを人毎にさして山賤の男とも用ふるに足らずとす故に山中の凡民まで武用に立たざる者は一人もなきよし』と、以て戰國の爭氣浸潤せるを知る可きである。

室町時代に胚胎した所の政治的經濟的の極端なる亂暴なる恐怖時代は此時代でないか、果して然らば上記の如き社會組織や社會精神の存するも當然である、であるからして武士も農夫も火にてやかれ水にてうたれ慘々なる戰國の過程を經て稍く平和を憧れ秩序を希ふに到つたのである。

元親退去の後阿波は蜂須賀政勝に給ふた政勝之を辭したから子家政に給ふた、內一萬石は住吉の地に赤松則村を封せられた、則村は回心の奇で秀吉中國に得て南征に順はしめ此處に封じたが關原の役東軍に屬せざりしかば慶長五年十月一日に自殺して家亡んだ、其跡は蜂須賀氏之を併せ得た。

第八章　江戸時代

A　緒言

そも〳〵　江戸時代には德川家康の幕府を江戸に開きしより、德川慶喜が太政を返上したる凡そ三百年(慶長五年—慶應三年)の間を云ふのである、此時代を通じて阿波は蜂須賀氏の領知する所となつて居つた、無論長き間の事として歷史的變遷は數ならずある筈であるが此時代と次の明治時代との研究は私に充分でないから兩時代とも略述する事とする。

却說蜂須賀氏は諸系譜に順へば淸和源氏足利高經の裔であると云ふ、夙に尾張國海東郡蜂須賀に居たから姓としたのである、室町季世群雄雲の如く起れる中に蜂須賀政勝も小さくはあれど野武士の宗として風雲に際會せんと希ふて居つた、此時彼の豐臣秀吉が未だ猿面の小冠者日吉丸と云ひし頃に政勝の世話になつたので、秀吉の出で〻織田信長に仕ふるや其もかりを以て信長に仕へ、後には秀吉に仕へた、政勝の子家政は初め秀吉に仕へたが秀吉の死後一旦封を辭し(形式だけではあるが)て家康に子至鎭を推し更に舊封を受けしめた。

至鎭以下、忠央光隆綱道綱矩宗員宗英に到つて其血統絶へ、高松藩主の族松平氏の子を嗣とした、之宗鎭である、宗鎭の次は至央之同じく松平氏の一族である、至央の次は重喜之は出羽侯佐竹氏の第四子である、其子治照其子齊昌に到りて又子なく、四度其血統を更て將軍家齊の子齊裕を迎へたが其子茂照に到り王政維新となつた、茂照其後東京に移住して門葉益々榮へて居る次第である。

德島縣誌畧の著者は斯の如き再三再四の血統更改に就て論じ、『是に依りてみれば尾張蜂須賀の正統は第九世宗英に到りて盡き(中略)竟には德川氏の裔を迎ふるに到る凡此間豈多少の議論なからん將た衝突を免るゝを得ざらむ然れ共蓬庵義傳興源の三主(家政至鎭忠央の法名)相次ぎて阿波國に君臨したるの範は終に多く之を改めざりしならむ乃ち阿波國の民人は細川三好二氏の極梏を脱して泰平の澤に浴せし事二百餘年の久しきに及べり』と云つて居る。

B　蜂須賀氏の藩制

鎌倉室町安土桃山の時代を經て江戸時代に入るや初めて知るのは同じ武家時代とは云ひながら、何處か警察國家の匂のする封建制度の尤も完全に成立して居る事であると思ふ。

蜂須賀氏世々の當主を殿様と云ひ參勤して大抵は江戸にある、至鎭が大阪陣の功に依り淡路を加賜せられたから阿淡兩國の大守二十五萬石の大々名で頗る門地を張つたらしく江戸にても頗る勢が在つたと云ふ事である。

國政は大抵家老之に任じて所謂仕置をする中老は家老を補佐し又奉行組頭海上方となるのである、次に物頭は銃卒の長となり組士は旗本となりて外に町奉行郡代奉行元締目附等の職をとつた、扈從は殿中の詰役さては御供の様な事項を務めて居つた。

此中で家老中老物頭組士は所謂高取りにして一萬四千石以下百五十石を給せられた、大中扈從等は扶持人と稱して五人扶持(十石)より三人扶持を給せられた、以上高取扶持人を總稱して士分と云ひ所謂侍の身分を以て居つたのである。

士分の下に卒あり所謂御弓鐵砲等なぞである、之は士分に準ぜられる。

却説士分準士分の知行は郡村に酸地せられ例へば家老賀島家は那賀郡富岡附近に同じく家老稻田家には美馬郡猪尻附近にと云ふ如くであつたが、其本第役宅長屋の類は云ふ迄もなく德島城を圍みて所謂御城下の市街には士商別廓を呈して居たのである、此の商人を町人と云ひ各二町毎に年寄五人組を置き市中全體に宿老二人あり奉行之を統ぶれ共多少の自治權を許るされて居た、城下外の住民は百姓である、百姓共には庄屋五人組のあるあり、組頭は數村を管して郡代奉行之を統べ治めたのである。

當時諸役人は一般に行政裁判の權を兼ね、軍事をも兼ねて居るのもあつた、總じて領民に對しては活殺自在の權を以て居たから、士民の區別は尤も甚しく、士農工商と知行米の生産者には體よく花を與へた利己的重農主義を實行しては居るものゝ百姓なぞは土地の虫と云ふ見識で、無體打なぞゝ云ふ

事もあつたのである、從て町人が御銀主となり一旦御目見へ仰付る如きは無上の光榮であり、町人百姓なべて名字帶刀の御免あるは眞に家門の誇り子々孫々に傳ふる底のものであつた。

C　歷代三百年

(一)緒言　茲に早々として歷代三百年の變遷を顧みるに、蜂須賀氏は其先足利氏に出ずとは云へど海東郡の一スクワイアーに過ぎなかつたのが、尾濃の將士戰國時代の中心的大勢を作り得た時に乘じて大諸侯となり、彼の江戸時代初期の危險なる形勢にも耐へ得て今日の昌榮あるに到つたのには、政勝の如き、家政の如き、將至鎭の如き英主の初代に於て家基を固めた爲であると云はねばならぬ。

(二)政勝　太閤記に記るされたる矢矧橋一條の奇譚は茲に野武士の宗たる蜂須賀小六政勝の名を幼き童の心にさへ長く銘して忘れしめざらしめた、彼に此時に後の木下藤吉又後の羽柴筑前守秀吉又後の豐臣太閤秀吉たる猿面の小冠者日吉丸を扶助したから、遂に織田氏の爪牙となり織田氏亡んで豐臣氏の部將となり、播磨國龍野城に居て西郡五萬石を領し一軍の重んずる所となつた。

天正十三年豐臣氏の南征するや蜂須賀氏之に從ひて功あり阿波十八萬石に封せられた、然るに政勝老ひて之を辭したから子家政に給ふた、後間もなく百戰從はざる無き老將も子家政の俊敏なるに安じて逝去した。

(三)家政　尊語集一書あり家政の人物を語つて餘ある樣である、武略に富み治術あり、外交の機微に通じた、恰も小さき家康の樣な人柄であつたらしい。

彼此國を傾するや、努めて士民を愛撫し產業を起した、中にも藍業鹽業の如き今日に到るも士民餘澤を受けて居る次第である、若し夫れ祖谷の土蠻不軌を計るや恩威並び示して之を土佐に對する藩屏の如く化した。

秀吉に仕へて家政は每々の戰爭にも從ふた又朝鮮征伐にも從ふて武名を揚げた、乍然秀吉の死して後、彼は天下の大勢を看取して忽ち家康に附屬し家門を保たんと決意した、彼が秀吉の墓骨未だ生々しき時にもかゝはらず秀吉の遺制を破り家康の養女を子至鎭に迎へた一條は實に關が原合戰の一導火線であつたのである、彼はかくて此戰に功ありて赤松則村が遺領を併せたのである。

之に就て云々する人もないではないが彼も德川氏の爲に高壓せられて家名を失はゞ祖業を破るまゝとする以上止を得ず懷柔せられた迄である、從て名分にも頗る苦心した樣である。

卽ち大阪の陣には一先づ阿波を豐臣氏に返へして自らは富岡に匿れ、更に功によりて德川氏より阿波を受けたのである。

夫から勝浦郡小松島に豐國大明神を祠つて浩恩を思ひ、大阪城へ名こそ浮浪の武士なりしかど其の勇士を撰んで秀賴に捧げ、此の血あり涙ある僅少の勇士の生命に依て一藩の魚望せる平和を購はんとしたのである。

四)至鎮　家政の子である、新に德川氏より封を受け阿波に加ふるに淡路を得た、之大阪陣の功に依てゝある、之より先彼は德川氏の養女を娶つた位であるが志を深恩ある大阪に致して江戸を好まなかつたのは名古屋城建築の際國許に致せし書翰に依ても知られるのである、乍然後見せる家政の司配宜敷を得て軍忠を江戸幕府に致し此の榮賞を得た、彼勇武にして端直士心を得て居たが比較的若くして病沒し遺子忠央を祖父家政に殘した、或は德川氏の毒殺に逢つたとも云ふが之は謬傳である、私は思ふ、彼の両加藤亡び福島滅するに到り豐臣恩顧の蜂須賀氏が此種の運命に逢はなかつたのは當時の當主忠央が一少年に過ぎず幕府の猜疑を買ふ可くもなかつた爲であると、但老將家政の外交上の苦心も在つたのでもある。

(五)以後　忠央の背後に家政は藩制を完ふし得て茲に冥目した、忠央政を親してより以降大體に於て舊體を守りて富强を計つたから、亂後贅國であつたけれ共大ひに榮へて阿波藍阿波織齋田擅など尤も名あるに到つた。

忠央の後九代嗣絶へて他家より嗣を迎ふる再三再四であつた、此間には驀同閥臭の事もあり、苛政誅求の事もあり、種々の變遷も在たが總て之を畧する、只幕末の狀況を小述すると、阿波藍の保護的勸業の結果、蜂須賀氏は常に富み且榮へて居たが終りには御銀主の實力も增進し實質に於て町人は武士を支配した幕末に到つては只事なかれと云ふ有樣であつた、長州征伐の如きにも兵を淡路迄出したけれ共只飽醉を事として一歩も戰場にしなかつた、德川季世の將軍は他の理由もあり悶死したが阿波もたのまれずと歎いたと云ふ事である。

D　德島の繁昌

蜂須賀氏初め一宮城に居たがやがて德島城を營築して入城した其晩酒肴を城下の士民に給ふたから士民共に醉ふて大に踊つた、之德島盆踊の起源であると云ふ、以來天下和平し且阿波は藍作隆盛に及んだから上下自ら富み榮へて盆踊の如きは歲々年々非常なる勢を以て華美に趣き國外にも聞ゆるに到つた。

之等の事情もあり藍其他國產の賣却地なる大阪とは一葦帶水の事であるから一般衆俗を通じて大阪風の流行をみたり、殊に義太夫節の如きは兒童走卒も口にする有樣となり今に及んで居る、尤も江戸系統の文華も武士階級に行れたものと信ぜられる。

德川時代に出版せられた『阿波名勝圖會』の挿繪の中に新町橋のがある、士民男女往來せるさま如何にも當時御城下なる德島の繁昌が想像せらるゝのであるが、私は今に古老が蓬庵公の遺德を說くものあるを庶俗に見て眞に尤の次第なりと思ふ者である。

第五編　明治時代

私しは記し來つて明治時代を略述するを遺憾に思ふが、史料も貧しくはあり旁々單に主なるオーリチーの變移を以て止める。

明治一　今上天皇御即位あり、蜂須賀茂照二十五萬石を以て阿波淡路両州の大守たり、

二　版籍奉還德島藩と稱す知事蜂須賀茂照なり、

四　德島縣と稱す大參事井上高格、

五　名東縣と改む參事久保斷三任せられたり、

六　香川縣を合す名東縣權令林茂平任せらる、

七　縣會を開く古賀定雄權令たり、

八　富岡敬明權令となる、

九　高知縣に合す縣令渡邊國武なり、

十二　德島縣を置き縣會を開く北垣國道酒井明德相次で縣令たり、

さて地方の最近代は府縣制の實施前と後に分ける、前期は依然として封建的な所があつて、蜂須賀侯が知事たる時に有名なる稻田騷動があつた、詳細は不明であるが小記する。

『當時封建の餘風未だ脫せず動もすれば舊藩をみる國家の如く榮辱禍福一に舊藩を以て準率とす偶ま稻田邦植の家隸三田舁馬維新創草を機とし藩廳に乞ふに二三の條項を以てせり然れ共其事多くは稻田家君臣の情誼に基き新制の容る可からざる所なるを以て藩廳の說諭藩主の慰言懇切なりしも聽く所なし於此乎德島藩士中大に之を憤慨して曰く咄陪隸濫に口吻を弄して朝憲を蔑如し藩主を憂悶せしむ歸する所は家を化して國となし其主をして我が藩主と比肩せしめ其の身等又從て自ら爲にする所あらんと欲する也宜敢一舉其の巢窟を衝き渠等をして先づ膽を寒からしむるに若くはなしと竟に阿淡一齊期を刻して事を發せむとするに到れり先是某等東京に往きて奔走周旋する所あり德島藩の儒員新居與一助首として事に斡旋に從ふ』

『明治三年五月十四日藩兵第三小隊遂に藩廳の節度に從はず私に出でゝ稻田家の配地其の美馬郡猪尻村に在るを襲はむと欲し行て名西郡下浦村に到る九郎軍監下條勘兵衛と共に尾し馳せて及ぶを得たり乃ち諭すに(中略)輕舉暴進の徒聽かずして進む九郎等以爲く復命に辭なし(中略)竟に傍近願成寺の客室に入り二人與に屠腹して死す』(德島縣誌略)

事平いで輕舉の人々は斬首せられたのであるが次いで事は國外であつたが西郷騷動が起つた、古老の說に依ると新政に充ざる者多く當時の『一枚ずり』には官軍の勝報中暗に敗報なるを示さずんば買ふ者なかりしと云ふ事である。

斯て『西郷騒動』の終結後『自由民權』の思想海南の一角より溢れ出でゝ阿波士人の之を主張する者多く社を結び説を演べ頗る賑であつた。

尙少く承前してオーソリチーの變移を記す。

明治十九　酒井明德知事となる、

廿二　市町村制實施櫻井勉知事たり、

廿六　村上義雄知事となる、

廿七　日清戰爭、

廿九　山縣伊三郎知事となる、

卅二　李家裕二知事となる、

卅三　有田義資小倉久知事となる、

卅五　龜井英三郎知事となる、

卅七　床次竹二郎知事となる、日露戰爭あり、

卅九　谷口留五郎知事となる、

四〇　皇太子殿下行啓、

四一　渡邊勝五郎知事となる、

四二　澄縣澄市大祝典をなす、

四三　德島小松島間鐵道許可せらる、

之等は實に最近世に屬する事項であるが日清役に丸龜聯隊日露の役に四十三聯隊の武名を輝したる如きは今更詳說の要はない、殊に日露の役の地方史的事項に就ては『德島縣三十七八年戰役史』の著編あり、就て看る可きである。

若夫れ戰後皇儲親しく行啓して治をみたまふた時、海南の民族如何ばかりか奉賀奉迎の誠を現したか、之眞に詳述する迄もない事であろを。

阿波史　終

年中無休刊

京都日出新聞

定價壹ヶ月金參拾參錢
郵稅壹ヶ月金拾五錢

一社說は百般の出來事に涉り觀察が偏局しない
一京都帝國大學其他諸學者の意見議論は常に光彩を放つて居る
一美術工藝界の消息及談話幷に織物染物の流行等の記事は最も迅速なり
一物價欄は各地の定期及商品等の商況は最も正確迅速なり
一小說と講談は每載非常に好評を博しつゝあり

明治四十四年七月三日印刷
明治四十四年七月十五日發行

阿波史與附
定價金壹圓

編輯兼發行者　手束愛次郎　京都市上京區吉田町川端字西川原二十一番地
印刷人　湯淺喜三郎　京都市上京區釜座通御池上ル下松屋町
印刷所　合資商報會社　京都市上京區柳馬場通二條下等持寺町十番戸

不許複製

發賣元　德島市新町橋畔北詰　黑崎寶仁堂書店

334
12

334
102
Ⓜ

026025-000-6

334-102

阿波史

手東　愛次郎／著

M44

ADC-3668